

発行元

コープこうべの平和サイクリング  
広島平和クリ  
2024

# 被爆地を駆ける

## 「平和」を学んだ2日間

2025年3月26日、27日の1泊2日で「広島平和サイクリング旅2024」が実施されました。中学1年生から高校3年生男女10人が参加し、広島戦争を知りました。「平和」の大切さへ理解を深

め、未来に繋いでいくため、旅で学んだことを周りに伝えることが目標です。初日は、ハチドリ舎に訪問し、被爆した岡本さんの話を聞いたり、広島市街地をレンタル自転車で走りまわりました。ガイドの話聞きながら、原爆ドームや日本赤十字原爆病院後など戦争の傷跡を巡りました。広島原爆資料館では、当時の貴重な資料などに触れ、戦争や原爆の悲惨さを学びました。

2日目は被爆した本町、袋町小学校の跡地、爆心地、旧日本銀行広島支店を巡り、ホロコースト記念館を訪問しました。第2次世界大戦中に起きたユダヤ人迫害の歴史から、「平和」について何ができるのか、ホロコースト記念館が果たした経緯について学びまし

た。このツアーで私たちは広島で起きた悲惨な過去を知り、「平和」について学び、議論し合い理解を深めました。今年には終戦80年です。あらためて現在の平和をかみしめながら、戦争のもたらした悲惨な出来事を学び、繰り返すことのないように、次の時代に伝えたい。これからどんな活動をするか、楽しみにしてください。（大橋蓮）

袋町小学校 戦後八十年の伝言  
爆心地から460メートル、袋町小学校は大きな被害を受けました。平和資料館となった今、見学できる、壊れた扉と窓、煤が付着している壁と天井が当時の様子を想像させます。学校は被爆から約10か月を

経て、昭和21年6月に全児童37人で再開されました。学校の改装もあり、創立100周年記念式典を行えるほどに復興しました。現在は新校舎となり、西校舎は平和資料館です。平成11年3月、壁面の



平和資料館などで原爆がもたらした被害について学びました。原爆は爆風や熱線、放射線などで被害を大きくしました。爆風は、爆心地に数十万気圧とともに発生し、風圧は1平方メートルあたり1トーン、秒速

はおよそ300メートルにも及びました。強烈な爆風で、爆心地からおよそ半径3キロメートルの範囲にある建物のほとんどが吹き飛び、残ったのはわずかでしかた。道路はガレキでふさがれ、押しつぶされた人々か

らの悲鳴があちらこちらから聞こえていました。爆風により割れてどがたガラス片が、コンクリー

トや人々に突き刺さる二次被害も甚大でした。原爆が爆発した瞬間、熱線の温度は太陽とおなじくらいにな

り、地面の温度はおおよそ三千度から四千度になりました。熱線で皮膚が火傷でみみず腫れの上になった「ケロイド」と言われる症状や、皮膚がだらりと垂れ下がってしまったような状態、失明などの被害を生みました。ささげるものがない中で熱線を浴びた人の多くが即死しました。（後藤 莉々唯・スマレ）

## 襲い来る爆風と熱線 地面の温度三千から四千

## 袋町小学校 戦後八十年の伝言

漆喰の一部を剥がす際に「寮内」という文字、解体で炭化した木レンガが残った壁や授業再開後に使われた黒板の後ろの壁から多くの伝言が見つかりました。時間経過で風化し、読みづらくなった数多いヒロシマの証言は、東京の教授らに議論されながら解析されました。



発行元

コープこうべ  
広島平和クリング  
2024

# 原爆昔話ではない

## 被爆傷に思い悩む日々過ぎ



1945年8月6日午前

8時15分、広島に原爆が投下されました。当時、岡本忠さんは1歳5カケ月で、お母さんと就寝時に被爆されました。被爆した記憶はないのですが、頭、左腕、背中に傷を負い、そのうち頭と左腕の傷は今も残る傷となりました。一時期は傷の事で思い悩むことがあったと聞きました。岡本さんが現代に伝えたい事は、『原爆は昔話ではな

い』と語っています。

原爆投下から80年がたち、忘れてしまう人がいる上に、「原爆のことなんか昔話だ」と思っている人がいます。現在も原爆症で白血病やがんなどに悩まされる人もおり、周りが病気で亡くなってしまいう人もいる中、「次は自分が…」と被爆された方々は不安な気持ちで日々暮らしています。この地球上には核が12520発あり、1発使うと

戦争になるだけではなく、地球が放射能で汚染されま

す。今も病気に苦しむ人もいます。世界には核兵器が

## 胎児にも影響した原爆



母親のお腹の中にいる時に被爆します。その後生まれてきて、頭囲が著しく小さい原爆病小頭病や知的障害等が見られたりすることです。この世に生まれてきてもないのに、被爆してしまい、将来にわたって

特に印象に残ったのは、広島に原爆が落とされたあとの「母親が必死に逃げた時の力」の話でした。つぶ

大きな影響を及ぼしてしまいう原爆の恐ろしさに、とても心が痛くなりました。生き延びることができた人々でも、多くの困難と苦悩が心身に残ってしまいます。いつ発症するかかわからない原爆病に怯えたりしながら日々を過ごしているそうです。「原爆病はうつる」

## 子を思う母の強さ

語り部伝承者・岡本忠



あるので「原爆は昔話ではない」と語っていました。今を生きる我々が、どう核に向き合わなければいけないか、岡本さんは「核は地

震などの避難訓練では対応できない。防ぎようがない。核自体をなくすよう、向き合っていくかなければ、核を無くすのだと呼びかけ

るだけではなく、核の恐ろしさを知って周りに伝えて、核をなくしていかねければならない」と、思いを伝えていきます。（大橋蓮）

れた家から這うように逃げ、赤ん坊だった岡本さんの泣き声を頼りに救出したという。その瞬間、母親は「何も覚えていない」と言っていたそうです。

人間は死を間近にすると、想像を超えたすごいエネルギーを発揮する。記憶が飛んでしまうのではないかと振り返っていました。生と死が混じり合うような状況に置かれると、不思議なことが起こるのだと感じました。子を思う母の愛の強さを感じずにはいられません。原爆の投下後、被爆者が次々に亡くなっていくことに恐怖を感じていたという話は、もし自分が同じような状況に置かれたら、夜も眠れませぬ。あるいは、一日一日をもっと大切に生きようとする事ができるでしょうか。それとも、そんな余裕などまったくなく、しょうか。あまりにも激しい体験に、想像ができません。（大橋蓮）（山田大登）

（山田 大登）

# 被爆三日後に運転再開

## 被爆地を元気づけた「日常の音」



路線電車が原爆投下後いつから運転を再開させたのか、そんな問いを投げかけられました。原爆の威力は凄まじく、人々を絶望のどん底に突き落とし、被害は甚大という言葉では言い尽くせません。広島市内にいた約三十五万人の朝が一瞬で消え去ってしまいました。熱線、爆風が苦しめ、今も尚放射線の影響は残ります。

広島市の死者数は約十四万人で、生き残った人の心情は到底言葉に出来ません。その中、三日で路面電車を復旧させた人がいます。人々の目の前が真っ暗になった時、ふと耳に入ってきたのが、日常の象徴の路面電車の音。下を向いていた人たちの顔を上げ、立ち

上がった。胸を張らせました。早く日常を取り戻せようという広島電車の呼びかけが三日で運転を再開させたのです。

路面電車は長い区間を走った訳ではありません。電車の日常の音が、復興の架け橋となつたと聞きました。新型車両が導入される

中、651号機、652号機は現役で、被爆電車と呼ばれていました。651号機は爆心地から700メートル付近を走行中に被爆し、爆風で脱線して黒焦げ状態に陥りましたが、当時の写真が発見され、原爆資料館に寄贈されました。被爆時に651号機に乗りし

## 平和を考える時間の中

広島平和サイクリングの旅は、心に残る貴重な経験でした。これまで学校での学びはありましたが、実際に広島を訪れて、原爆やヒロコーストについて改めて深く考えることができました。

特に、被爆体験証言者・岡本忠吉さんは、実際に体験された方から見た原爆の恐ろしさを聞くことができました。岡本さんの「原爆は昔話ではない」という言葉は、私たちが単なる過去の出来事としてではなく、実話としてその恐ろしさを次世代に伝えていかなければ



ばならないという強い思いを抱きました。平和記念公園や原爆ドームも訪れました。平和記念資料館には美

際に原爆によって影響を受けた物が展示されており、どれもその恐ろしい影響力をはつきりと示していました。

## 原爆慰霊碑が心に



原爆が落とされた広島市を平和都市に再建を祈願して建てた慰霊碑はトンネル形で、正面に原爆ドームが見えます。平和記念公園の慰霊碑を建設した丹下

健三は「人間は忘れる生き物だからこの戦争を祈願して建てた慰霊碑はトンネル形で、正面に原爆ドームが見えます。平和記念公園の慰霊碑を建設した丹下

もありましたが、協議を経て、原爆ドームを残します。被爆遺産は、先人たちのおかげで、戦争を知らない私たちに悲惨さ、平和の大切さを伝える役割

## 焼野原から緑豊かな街



同行した仲間たちと共に議論を交わし、お互いの意見や感想を言い合いつつ平和について改めて考える時間を持つことができました。共に考え、感じることで、自分自身の思いを深めることができました。私たちが最後、広島を訪れて原爆の恐ろしさを学び、それ二度と繰り返してはならないとい

うことを肌で感じることもできたのは、地域の方々の平和に対する強い思いと、支援してくださる多くの方々のおかげです。そのおかげで、私たちは貴重な経験をすることができました。私たちもこのような活動に関わることができるとを期待しています。(白井和奏)(水上明日香)

へ。丹下健三は、原爆が落とされる前から産業奨励館としてシンボリックな原爆ドームを、デザインに組み込み、あえて原爆ドームの見える角度に慰霊碑を作りました。トンネル状は、ここに眠る人々の霊を雨露から守りたいのです。慰霊碑に原爆死没者名簿があり、石棺正面に、雑賀忠義の「おらかに眠って下さい」という言葉が刻まれています。原爆ドームの見える基町の総合体育館は、屋根がコンパスのようで、折りの泉から体育館まで一直線。過ちを繰り返さないという先人の思いも一緒に繋がっています。(水上明日香)

平和サイクリングの旅は資料館や原爆に関連がある建物、慰霊碑をまわり、多くの話を聞きました。「原爆は自然が生み出したのではなく、人の手で作られたものだ」という言葉が強く印象に残っています。

広島は想像を絶する破壊と人々の苦しみの代名詞で、暗いイメージがありました。今は、希望と再生のシンボルで、回復力、適応力、復興力の姿を体現しています。80年前焼け野原の広島を想像するのはとても難しいです。戦後は「75年間は草木は生えぬ」と言われていた。原爆の熱線や放射線の影響がありながら、広島市内に残った木は160本にも達しませんでした。その状況の中、外国から植林用の木が送られ、被爆した数年後には緑がふれる街となり、戦後80年の現在も、緑が大切にされています。(喜多方美杜)(後藤スミレ)

